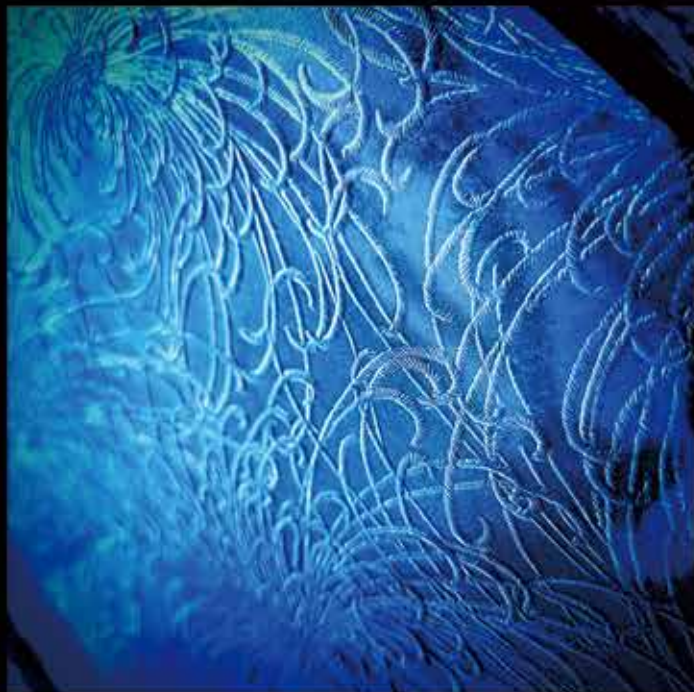


建築人

2025
12

Osaka Association of Architects & Building Engineers
Newsletter "Kenchiku-Jin" No.738





「MOAIの独言」

日々心に引かれた光景やモノをスマホで撮影、加工した作品
私が惹かれるのは
蓄積された時間が感じられるモノや光景
自然の造形物
今その時しかない光
固定概念にとらわれず自由に感じてください

Photographer MOAI

岩手県盛岡市出身
1985年大阪芸術大学卒
同年広告企画制作会社にカメラマンとして入社
あらゆる業種業態のクライアントの撮影に携わる
1996年フリーランスとなりPhoto Office MOAI設立
大阪を拠点に広告写真を中心に活動中

建築人

2025.12 No.738

Osaka Association of Architects & Building Engineers
Newsletter "Kenchiku-Jin"

表紙の建築 「大阪公立大学 中百舌鳥キャンパス 工学系学舎」2024年

第17回 建築人賞新人賞 受賞作品
設計：KAJIMA DESIGN（基本設計：東畑建築事務所）
施工：鹿島建設
撮影：エスエス大阪支店 秋田広樹

『大阪公立大学』設立に伴う大阪府立大学・大阪市立大学の統合プロジェクトの1つ。本計画・中百舌鳥キャンパスには新工学部の学舎が同時に整備された。複数棟を同時に計画するメリットを活かし「より開かれたキャンパス」となっていく仕組みを提案した。

2 MOAIの独言

4 Gallery 建築作品紹介

「京都女子大学 A校舎」

設計：日建設計

施工：西松建設

「龍谷大学 | 龍谷大学付属平安高等学校・中学校 黎明館」

設計：竹中工務店

施工：竹中工務店

「Ceremony Hall『kanon』」

設計：YIA イシウエヨシヒロ建築設計事務所

施工：建相

「守口市地域生活支援拠点オールケアあゆむ」

設計：THNK一級建築士事務所

施工：大幸綜合建設

「桃山の家」

設計：ブリアデザイン一級建築士事務所

施工：サカヨシ建設

10 動静レポート

11 Topics

12 Information

14 建築びとに訊く

18 記憶の建築

「佐賀県職員研修所・教育センター」1979年
知られざる村野建築を佐賀に訪ねて / 松隈 洋

建築人 No.738 2025年12月号

監修 公益社団法人大阪府建築士会 建築情報委員会

編集 建築情報委員会『建築人』編集部

部門長：松下典央

委員長：武藤優哉

編集人：河野 学 荻窪伸彦 笠松哲司

川北武志 小谷美樹 昇 勇

中北 力 春岡須磨子

三谷勝章 村上栄司 山本恭史

事務局：辻本和人 母倉政美

ロゴ・フォーマットデザイン 芝野健太

印刷 中和印刷紙器株式会社

令和7年12月1日発行

発行人：会長／岡本森廣

発行所：公益社団法人大阪府建築士会

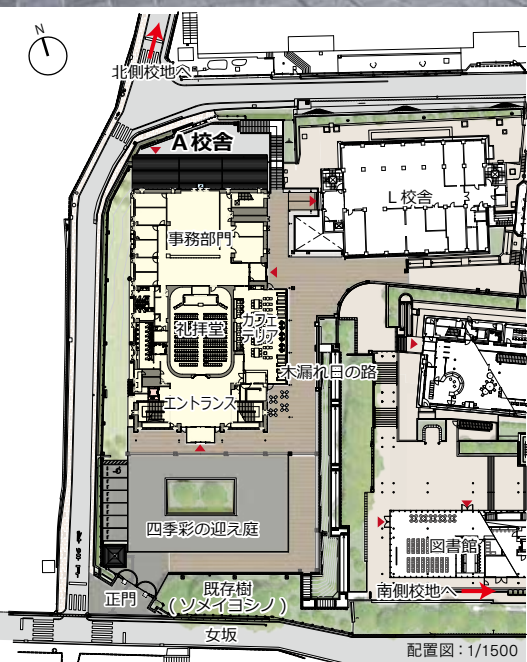
〒540-0012 大阪市中央区谷町3-1-17 高田屋大手前ビル5F

tel. 06-6947-1961

Gallery



正門



配置図：1/1500



木漏れ日の路



整備前：正面に駐車場があり、キャンパス全体の「顔」としての存在が認識しづらい状態



四季彩の迎え庭



1階 エントランス



2階 データサイエンス学部 ラウンジ



3階 ロビー



地下1階 学園講堂



1階 カフェテリア



1階 礼拝堂

2010年から続くキャンパス整備計画の最終章となる新校舎の建設と正門・正門前広場の整備計画である。計画地は各校舎が街に点在する形でキャンパスを構える中心に位置し、訪れる人々を出迎える「正門」「顔」となる重要な役割を担う。連続切妻屋根や赤レンガ調タイルの外壁により京女のアイデンティティを確立した校舎を実現。これまでは単なる通過動線であった高低差のある通路を季節感あふれる「四季彩の迎え庭」や自然を感じながら心地良く佇むことのできる「木漏れ日の路」として整備し、隣接してカフェテリアを設けることで屋内外のアクティビティが連続し、学生の賑わいや交流が生まれる豊かなオープンペースとバリアフリー動線を確保。その他、礼拝堂、講堂、データサイエンス学部関連諸室、本部・事務機能など、学生生活と学園運営の中心となる多機能な施設で構成され、施設特性に応じた色彩計画と温かみを感じる木質系素材の共通採用により、学生のための豊かな感性を育む多彩な居場所を創出した。

所在地：京都府京都市
用途：学校(大学)
竣工：2024.11
構造規模：S造一部RC造、SRC造
地下1階
地上3階
敷地面積：12,455.86㎡
建築面積：1,863.05㎡
延床面積：5,470.21㎡
写真：伊藤 彰[アフォト]



創立150周年を迎えるにあたり、中高大の一体的な施設設備整備事業の一環として計画された新キャンパスである。中高機能だけでなく大学施設や一般利用可能なカフェを複合的に組み込んだ「中高大連携」施設であり、吹抜を介して中高・大学・まちのつながりを生む空間構成とした。共用部に配置されたさまざまな「居場所」では、共通言語として木の設えとすることで領域のわかりやすさと居心地のよさを表現した。七条通に面した半屋外の吹抜空間に浮かぶ「共創の樹」は、多様な人々がつどい、つながって生み出す多様な価値創造のシンボルとして、また七条大宮を特徴づけるランドマークとして構想した。

所在地：京都府京都市
用途：中学校・高等学校・大学
竣工：2025.03
構造規模：鉄骨造・鉄筋コンクリート造・鉄骨鉄筋コンクリート造
地上3階
敷地面積：22,393.06㎡
建築面積：1,679.03㎡
延床面積：4,034.55㎡
写真：母倉知樹



家族で行う葬儀には、作為的で過剰な演出はいらないと感じていた。自然に囲まれて、風に揺れる草木や太陽の光と影、雨、雪…四季の移ろいが故人と向き合う時間を豊かにすると考えている。自然を感じることで外を認識し、そして内にある家族を自覚させる関係性を見ることができたと思う。エントランス棟、ホール棟、サービス棟の三つの構成で、各棟は異なる屋根の形が民家のスケールをつくり、町のスケールに溶け込む。それぞれ特徴的な屋根には天窓を設けて、自然光が内部空間の輪郭を鮮明にして静かな空間を印象的にしている。沿道にベンチを設けた前庭は、散歩する地域住民に開放しており、日常生活の延長に続く親しみある場として使って欲しいと思う。

(石上芳弘)

所在地：愛媛県松山市
用途：葬祭場
竣工：2025.08
構造規模：木造
地上1階
敷地面積：498.64㎡
建築面積：177.14㎡
延床面積：151.42㎡
写真：しんめんもく
後藤健治



オールケアあゆむは、未就学児から成人まで障がいのある方々の地域生活を支援する、守口市初の医療的ケア対応型地域生活支援拠点である。機能性や安全性が求められるなか、利用者が日々の中で「体験」できる環境を目指した。

木造平屋建てで、中央の広場を囲むように各室を配置し、どの部屋からも外の気配が感じられ、気軽に出入れる構成とした。広場中央のエノキは夏に木陰を、冬に陽光を取り込み、やがて大樹となり、地域の記憶に残る象徴となることを期待している。

送迎用玄関と地域交流スペースに面した玄関を分け、動線を整理。広場を完全に閉じず、柔らかく多層的に囲うことで、地域とのつながり方を段階的に調整した。

所在地：大阪府守口市
用途：児童発達支援、生活介護 他
竣工：2025.05
構造規模：木造
平屋建て
敷地面積：1974.35㎡
建築面積：1010.75㎡
延床面積：953.67㎡
写真：多田ユウコ



桃山陵を背景に、醍醐の街並みを一望する立地に建つ事務所付長屋。住宅街の角地に位置する敷地は、2方向を緩やかな勾配を有する道路に面する。平坦な住宅街と比較して、隣地とは異なるグランドレベルを獲得できるのが、こうした敷地の利点ともいえる。30度程度の法面に上層が下層より一回り大きな床面積となる2層の箱を浮かべ、それらを取り巻くように緑の帯を整えた。上下階の面積の差分は緑に対して開放したバルコニーとし、周辺に対して開く住まいを実現した。天空に近い場所は構造ピッチを素直に建具割で表現した構造的な建築とする一方で、大地に近い場所は山の一部を切り取ったような自然らしい庭とした。

所在地：京都市伏見区
用途：事務所付長屋
竣工：2024.02
構造規模：木造2階建
敷地面積：220.14㎡
建築面積：102.47㎡
延床面積：177.95㎡
写真：松村芳治

動静レポート

会長動静

- 10/27～31 第25回日・韓・中建築士協議会 蘇州会議
- 11/1 大阪府建築士事務所協会・湯浅桂 輔副会長 黄綬褒章受賞祝賀会
- 11/2 大阪府宅地建物取引業協会・神丸 豊副会長 黄綬褒章受賞祝賀会
- 11/4 奈良県建築士会・中尾会長面談
- 11/7 命を守るひと部屋断熱・耐震協議
- 11/10 大阪府収用委員会
本会組織体制に関する意見交換
- 11/11 大阪府収用委員会協議
大阪府中小建設業振興大会
- 11/13 国土交通省住宅生産課協議
ミャンマー歴史的建造物修復協議
- 11/14 正副会長会議、運営会議
- 11/17 在阪建築4団体会長・支部長意見 交換会
- 11/19 臨時総会、理事会
- 11/20 日本建築センターとのミャンマー技 術支援会議
- 11/21 建築紛争セミナー
- 11/22 「命を守るひと部屋」シンポジウム in 大阪
- 11/25 大阪府収用委員会

令和7年度 臨時総会報告

11月19日に臨時総会を本会で開催し、総正会員数2,103名に対して1/2以上となる1,464名（うち委任状1,436名）の出席で定款第17条に照らして成立しました。

◇第1号議案 公益認定法改正に伴う定款等の変更
本年4月に施行された「公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律」の改正により、外部理事及び外部監事の設置が義務付けられたことや、会計基準等が見直されたことを受け、本会の定款及び規程の変更が承認されました。

◇第2号議案 令和7年度役員(外部監事)の承認
外部監事として井上会計事務所代表の井上智英子氏の就任が承認されました。

11月度 理事会報告

日時 11月19日(水) 16:00～18:00
場所 本会東会議室
出席 理事 40/45名 監事 3/3名

【審議・承認事項】

(1) 会計報告、入退会

(円)	10月計	累計
収入	22,624,749	122,139,658
支出	23,220,450	92,063,413
差引	-595,701	30,076,245

(人)	10月	入会	退会
正会員	2,103	1	7
準会員	28	0	0
特準会員	22	0	0
賛助会員	155	2	0
計	2,308	3	7

上記の当期経常増減明細と入退会を承認しました。

(2) 事業収支報告
マンション大規模修繕受託業務や「建築基準法及び同大阪府条例質疑応答集」の販売、耐震診断・改修講習会の申込みが堅調で予算を大きく上回っていることを報告しました。

(3) 令和7年度臨時総会の議決事項
前述の臨時総会の議決事項を報告しました。

(4) 新北市建築師公会との交流
11月27日に来日する新北市建築師公会との交流促進を目的とした確認書案、ならびに千里ニュータウン、安藤忠雄氏ギャラリー、人と防災未来センター、竹中工道具館等の視察案について承認しました。

(5) おおさか大会の打上忘年会案
来月の理事会後、おおさか大会にご協力いただいた会員の皆様との打上忘年会の開催案を承認しました。大会にご尽力いただいた各先生方もご招待する予定としました。

【報告事項等】

(6) 第5回近畿学生住宅大賞の経過報告
応募作品を審査し13名が一次審査通過、9作品の企業賞の選出が終了しました。一次審査通過の作品を対象として、12月6日に大阪府建築健保会館にてプレゼンテーションを行い、当日5名の審査員が最優秀賞、優秀賞、奨励賞を決定します。また、今回から近畿二府四県の建築士会会長による会長賞も選出する予定です。

(7) 定款第21条4項に基づく事業執行の報告を行いました。

(8) その他
①各部門に対して、令和8年度の予算素案を1月の運営会議に、また令和8・9年度の役員候補者の推薦を1月の役員候補者選考委員会に提出いただくことを依頼しました。

②来年5月20日にKKRホテル大阪で開催予定の令和8年度定時総会の講演者の推薦を依頼しました。

③令和7年度在阪建築関係16団体新年交礼会の募集開始を告知しました。

第25回日・韓・中建築士協議会 蘇州会議

日本・韓国・中国の登録建築士の団体が3か国団体間の技術交流と友好を目的に1997年から年一回開催している「日韓中建築士協議会」が蘇州(中国)で10/27～31に開催され、日本建築士会連合会からは古谷会長、岡本副会長、連合会国際委員が参加しました。「グリーン・ビルディングと低炭素開発」、「グリーン・ビルディングにおける地域イノベーション」、「都市再生のための設計手法」をテーマに、ワークショップ・会長会議・HOPPA会議・各セッション発表が行われました。



東海道五拾七継を巡る 第1回 大津宿まちあるき ～「道の国」近江 大津宿を歩く～

日程：令和7年10月18日(土)

会場：滋賀県大津市

参加者：25名

石貫方子(地域まちづくり委員会 北河内地域)



今年は全国大会おおさか大会が開催されるため、日本建築士会連合会の会報誌「建築士」8月号の特集に「東海道五拾七継」を掲載することとなり、大津から、淀、枚方、守口、大坂・高麗橋についての記事を京都女子大の北尾教授の指導の下、地域のメンバーで分担し、大津については滋賀県建築士会の市川さんの協力を得て掲載いたしました。そしてこの五拾七継を順にまちあるきする企画を立て、第1回として10月18日に大津宿を歩きました。

大津宿のまちあるきの講師は滋賀県建築士会の柴山直子さんです。JR大津駅びわこ口に集合し、最初に大津祭が行われる天孫神社にお参りし、滋賀県庁の前を通過して旧東海道へ出て、大津市の「旧東海道修景ガイドライン」をみながら町家を見て回りました。印象的だったのは昭和の初めごろに行われた道路の拡張工事のための「軒切り」で、それぞ

れ町家ごとに工夫して建物を改築し2階を座敷化した跡がうかがえました。また旧上野家大津町家の主屋がホテルに、蔵も住宅に改装の事例や、印刷会社があった町家(写真)をクラフトマンカレッジとして活用する事例を見学しました。そして札の辻(高札所)と本陣跡をみて、大津宿を出発しました。

旧東海道はここからゆるい上り坂となりました。京阪京津線の線路を渡り、歌舞音曲芸能の神様「関蟬丸神社下社」へお参り、更にゆるい坂を上って「旧逢坂山隧道」を見学。更に歩くと「常夜灯と車石」が見えてきて、更に歩いて「逢坂山関跡」に到着、上り坂はここまでというところでようやく休憩となりました。和歌によく出てくる「逢坂の関」とはこの場所のことだということです。

逢坂山をこえるとようやく下り坂で皆黙々とよく歩きました。「走井一里塚」では月心寺の門越しに井戸が見えました。そして「追分」に

到着。石碑には「みきハ京ミチ」「ひだりハふしミミチ」とあり、「プラタモリで見た!」という声があがりました。最後は「閑栖寺」でご住職のお話をお聞きし、車石の復元や大津絵をみて終了しました。

懇親会は逢坂山「かねよ」へ。約5kmの健脚コースを早歩きでしんどかったのか急遽参加者が増え、ビールで乾杯してきんし井を美味しくいただきました。



藤本壮介氏と歩く 大阪・関西万博 ― 多様でありながら、ひとつ

2025年9月20日、第67回建築士会全国大会おおさか大会の一環として、建築家で大阪・関西万博会場の会場デザインプロデューサーを務められ、かつ大屋根リングの設計者である藤本壮介氏による大阪・関西万博の案内に参加いたしました。

大屋根リングの構造：世界最大の木造建築としてギネス認定。「貫」構造を採用し、大林組・清水建設・竹中工務店の3社が担当。各工区で用いられる「楔」の形状に違いがあることの説明がありました。

大屋根リング東ゲート側に設けられた芝生の設計意図：「寝転がって夕陽を見たい」という発想から勾配を設け、海が見えるように設

計。大屋根リングを高さ22mとし、来場者を迎える象徴的なゲートとしました。

高さ制限の思想：大屋根リングのベース高さ12m、建物は17mまで。リング外側20mの高さに上ると全てがリング内に収まる構成。経済格差を風景に持ち込まないための思想であり、ミラノ万博でも採用された考え方です。
配置計画：内側に海外パビリオンとシグネチャーパビリオン、外側に企業パビリオンを配置。中央には森を置き、人工物ではなく自然を中心に据える日本の思想を反映。パビリオン敷地は「多様性」を意識し、あえてバラバラにしています。

特別体験：ドイツ館でのインタビュー、古谷

連合会会長設計のヨルダン館を古谷会長ご自身の案内で見学。急なスケジュール変更もありましたが、充実した内容となりました。

今回の案内を通じて、建築が社会的思想や価値観を形にするものであることを改めて実感しました。高さ制限は経済格差を風景に持ち込まないための工夫であり、中央に森を配置する計画は自然との共生を重視する日本の価値観を示しています。多様な文化や技術が集まりながらも大屋根リングの下で調和する姿は、まさに「多様でありながら、ひとつ」という理念を体現していると感じました。

(芳村隆史／特任相談役)



藤本壮介氏大屋根リングを解説



大屋根リング最頂部芝生広場



古谷連合会会長ヨルダン館を案内



ヨルダン館にて集合写真

建築士会からのお知らせ

令和7年度 建築士定期講習
12/12、1/21、2/13、3/26

建築士法の規定により、建築士事務所に所属するすべての建築士は3年以内ごとに定期講習を受講しなければなりません。本年度は令和4年度に本講習を受講された方や、建築士試験に合格された方が対象となります。未受講者は懲戒処分の対象となりますので必ず年度内に受講してください。

▼日程・会場・定員

- ※12/12(金) 大阪府建築健保会館 80名
 - 1/21(水) 大阪府建築健保会館 70名
 - ※2/13(金) 大阪府建築健保会館 80名
 - 3/26(木) 大阪府建築健保会館 70名
- 上記すべてDVD講習です。

※の日程：大阪府建築士会が運営

※以外の日程：大阪府建築士事務所協会が運営
(注) 各回定員に達し次第、受付を終了します。

時間 9:15～17:00(各講習日共)

受講料 12,980円(消費税含。事前入金)

申込 建築技術教育普及センターHPより

令和7年度監理技術者講習
12/19、1/14、3/11 CPD6単位

本講習会は建設業法に基づく法定講習であり、建築に特化したテキストを使用し、経験豊富なベテラン技術者の講師による解説と映像で、実務に役立つ情報を提供いたします。

日時 12/19(金)、1/14(水)、3/11(水)

8:55～17:00

会場 大阪府建築士会 東会議室

定員 30名(定員に達し次第締切)

受講料 WEB申込み9,500円

郵送申込み10,000円

申込 日本建築士会連合会HPより

<http://www.kenchikushikai.or.jp/torikumi/news/2015-07-28-2.html>

既存住宅状況調査技術者講習
更新講習2/25
CPD更新2単位

既存住宅状況調査は、登録機関の講習を修了した建築士のみに認められる業務です。ぜひ本講習で新たな業務の資格を取得してください。令和4年度に本講習を修了された方は本年度が有効期限となりますので、更新講習をご受講ください。

▼更新講習(DVD)

日時 2/25(水) 13:30～17:00

会場 大阪府建築士会 東会議室

定員 30名(定員に達し次第締切)

受講料 WEB申込17,000円

郵送申込17,600円

▼申込 日本建築士会連合会ホームページよりお申込みください。上記以外にオンライン講習も開催いたします。

<https://www.kenchikushikai.or.jp/koshukai/kizonjyutakujyokyochosa.html>

わくわく探検(駅前シリーズ)第22弾
大和川付け替えて消えた幻の吉田川跡をぶらり散策
―地名に宿る川の記憶―

近鉄けいはんな線～奈良線編

12/13 CPD2単位予定

建築士の会「東大阪」では、わくわく探検(駅前シリーズ)を開催します。

今回は近鉄けいはんな線 吉田駅を出発してかつての吉田川の流れを地名や地形に探しながら、町の記憶を辿る約4.5kmの歴史散策。失われた川の痕跡とともに、静かにまちの成り立ちを感じてみませんか。

恒例の賞品が当たるクイズもご用意。皆様のご参加をお待ちしております。

日時 12/13(土) 9:00～

集合 近鉄けいはんな線 吉田駅改札

解散 近鉄奈良線 河内花園駅

募集 30名(申し込み先着順)

参加費 会員・一般1,500円 学生500円

令和7年度地域文化遺産のガイド人材
育成講座 第3回
12/13

最終回は橋爪紳也先生の座学に加えて、船越幹央先生による中之島・船場のガイドツアー(まち歩き)を予定しています。大阪の歴史や文化、そして近代建築について学びながら、まち歩きスキルを身につける絶好の機会です。教養講座としてもお楽しみいただける内容になっています。

日時 12/13(土) 10:30～15:30

講師 橋爪紳也氏 船越幹央氏

会場 青山ビル

定員 20名

受講料 本会会員および大阪府ヘリテージマネージャー4,000円
一般4,500円

令和7年度 はじめよう、文化財の活用
12/14、12/21、2/11

毎回異なる国登録文化財などを会場に、ワークショップや建物見学、まち歩きなどを行います。歴史的建造物やまちなみ、そして伝統文化などを楽しみませんか。

第3回 12/14(日)

「能の入り口に入ろう」

会場 正木記念邸(忠岡町)

第4回 12/21(日)

「文楽人形でほっと一息」

会場 廣海家住宅(貝塚市)

第5回 2/11(水・祝)

「茶の湯にふれる」

会場 伴林氏神社(藤井寺市)

詳細は建築士会HPに掲載

知らなきゃ損!?
建築士のための補助金活用と提案力
向上セミナー
1/20 CPD2単位(予定)

建築士の皆さまの提案力向上と新たな事業機会の創出をサポートします。
明日から使える基礎的な知識を手に入れま



Informationの詳細及び申込みは大阪府建築士会ホームページに掲載しています。
http://www.aba-osakafu.or.jp/ メール info@aba-osakafu.or.jp
TEL.06-6947-1961 FAX.06-6943-7103

しょう。

講師 浅山貴宏氏
(中小企業診断士/宅地建物取引士)
日時 1/20(火)
18:30~20:00(集合受付 18:15)
受講料 会員2,000円 一般3,000円
会場 大阪府建築士会 東会議室
定員 50名

第20回国際企画海外研修旅行 「インドネシア」

2/19~25 CPD申請予定

今回はインドネシアのボロブドゥール、スラバヤ、バリを巡ります。ボロブドゥールの世界遺産、スラバヤ工科大学との交流会、バリではケチャの鑑賞等を予定しています。

日時 2/19(木)~25(水)

申込 12/20(土)まで

参加費 詳細未定につき申込者には別途お知らせいたします。

申込については事務局までご連絡ください。

高槻城公園芸術文化劇場見学会

3/19 CPD2単位(予定)

日本建築学会作品賞を受賞した高槻城公園芸術文化劇場は、規模や機能の異なる3つのホールと10室のスタジオのそれぞれに「すきま」を設けた分散配置が特徴的な劇場です。設計者よりこれまでの建築設計について語っていただき、この建築を成立させるための工夫等を紹介していただきます。

日時 3/19(木)

14:20~16:15(集合受付 14:00)

受講料 会員・一般ともに3,000円

会場 高槻城公園芸術文化劇場 南館

定員 120名

賛助会員の皆様へ

2026年 建築材料・設備機器 メーカーリストのご案内

本会HPへ掲載しております建築材料・設備機器メーカーリストについて、2026年の申込

受付を開始いたしました。ぜひこの機会に掲載をご検討ください。

掲載期間 2026年1月~12月

掲載料 11,000円(税込)

詳細 建築士会HPに掲載

その他のお知らせ

青函トンネル：技術の挑戦と未来への展望

1/15

日本を代表する土木工学の偉業、「青函トンネル」に関する講演会を開催いたします。本講演会は、当時実際に青函トンネルの建設に従事した技術者や専門家による海底トンネルの調査、建設、維持管理など幅広いトピックをお届けするとともに、それらを踏まえた未来への展望についてのダイナミックな意見交換をお届けします。

日時 1/15(木) 14:00~17:30

会場 ドーンセンター(大阪府立男女共同参画・青少年センター)5階大会議室2

定員 会場60名、オンライン100名

申込・詳細 地盤工学会関西支部HPより

COFI ツーバイフォー工法セミナー

1/27

カナダ林産業審議会(COFI)では、枠組壁工法(2×4工法)の基礎セミナーを開催いたします。

本セミナーでは2×4工法の入門・基礎編として、これから2×4工法に取り組みたいとお考えの方や、現在手掛けておられるものの分からないことがある方などを対象に、2×4工法の設計・施工のポイントをわかりやすく解説します。

日時 1/27(火) 9:50~16:00

会場 マイドームおおさか

定員 20名

申込・詳細 カナダ林産業審議会HPより

あつまれ!けんちく女子!

3/14

今回の「あつまれ!けんちく女子!」は一般社団法人大阪府建築士事務所協会が当番会となり、職種や世代の垣根を越えて、建物づくりに携わるすべての女性が集う場を創出します。本イベントは

- ・相互理解で、輪を広げる。
 - 業種を越えた“横”のつながり—
- ・未来へつなぐ、想いの継承。
 - 世代を超えた“縦”のつながり—
- ・社会へ発信する、私たちの姿。
 - 建築業界の“今”と“未来”を伝える—

を目的として開催します。

日時 3/14(土) 13:00~17:00

会場 マイドームおおさか

詳細 後日、大阪府建築士事務所協会HPにて公開予定

「建築人」Gallery掲載作品の募集

本誌「建築人」は毎月約3,000部を発行し、本会会員をはじめ官公庁、大学、図書館、出版社、報道機関等に頒布しています。Gallery掲載作品は「建築人賞」の候補となります。

●掲載記事 1頁カラー、写真4点程度

●掲載費用 100,000円

※1 初回割引80,000円(設計者および施工者が過去10年間、Galleryに掲載されていない場合)

※2 若手初回割引50,000円(40歳以下かつ建築設計事務所を主宰され※1を満たす方)

●詳細・申込 事務局担当:母倉
e-mail: info@aba-osakafu.or.jp
TEL: 06-6947-1961



金野千恵 Chie Konno

特集「建築びとに訊く」は、建築に関わる人「建築びと」に未来の建築について語っていただきます。建築そのものだけでなく、「人」に焦点を当てることで、多角的な視点や新規性も踏まえた幅広いテーマについてお話を伺います。

社会全体が目まぐるしく変化するにおいて、建築界も常に進化を求められています。建築はデザイン、テクノロジー、人間哲学、ライフスタイルなど様々な職域をまたいで成立すると考えられます。建築の未来を見通すためには、順応性を高めるために広い視野を持つと同時に、未来に繋がる上で重要なポイントにフォーカスする目線が必要であると考えます。

様々な「建築びと」の視点を垣間見ること、建築界全体の未来への一歩へ繋がることを期待しています。

第五回は金野千恵氏にインタビューを行いました。金野氏は建築設計事務所tecoを主宰されています。

住宅から文化施設、教育福祉施設などの建築設計に加え、まちづくりやアートインスタレーションなど、幅広いジャンルでご活躍されています。

代表作は、屋根付きの半屋外空間「ロτζア」を持つ「向陽台ロτζアハウス」をはじめ、2023年日本建築学会賞（作品）など多数受賞された地域共生文化拠点「春日台センターセンター」（2022年）が挙げられます。近年では、2025年大阪・関西万博の「ギャラリーWEST」の設計をご担当されています。このインタビューでは「ギャラリーWEST」のお話を中心に、近作についても語っていただきました。

略歴

一級建築士、博士（工学）

1981年	神奈川県生まれ
2011年	東京工業大学大学院博士課程修了
2011－2015年	KONNO 設立
2015年	teco 設立
2018年	teco株式会社に改組
2024年	スイス連邦工科大学チューリッヒ校（ETHZ）客員講師
2021年	京都工芸繊維大学 特任准教授
2025年－	同大学 特任教授

主な受賞

2024年	JIA 優秀建築賞 『春日台センターセンター』
2023年	日本建築学会賞（作品） 『春日台センターセンター』
2022年	2025年日本国際博覧会 休憩所他設計業務公募型プロポーザル 優秀提案者

ー本日は東京・台東区にある金野さんの事務所にてインタビューをさせていただきます。1階部分は街に開かれた構成となっていますが、どのような使い方を想定されているのでしょうか。

このオフィスビルは畝森泰行さんが主宰する畝森泰行建築設計事務所とt e c oのシェアオフィスで、入居時に共同設計して改修しました。1964年に竣工したオフィスビルの改修で、「BASE」と名付けました。

1階部分は「SQUARE」として、街に開けており、角地という立地条件も活かしながら街のイベントにも参加できるような設えとしています。また、大きなキッチンがあるので、日常的な調理の場に加え、ワンディレストランなどを開催することもあります。街の人が使えるギャラリーとしても開放しており、今の期間は事務所の隣にある洋食屋さんのマスターが撮った写真展を開催しています。

2階は「GARDEN」として、外部建具を取り払った庭のような半屋外空間となっています。緑の少ない街なので、働く場所に自然を供給することを狙いとしています。上部3,4階がオフィス部分で、5階がライブラリースペースです。RC造の賃貸物件のため、構造的な自由度が低い中、フロアごとにコンセプトを明快に設定し、空間としての特徴や、街への開き方を工夫しました。

ー設計プロジェクトについて、2025年大阪・関西万博の「ギャラリー WEST」のお話から始めさせていただきます。設計プロポーザルへ応募されるきっかけをお聞かせください。

私自身はこれまで万博に行ったことがなかったので、最初はどこか他人事のように感

じていました。東京オリンピックの時も同じような感覚で、無意識に距離を置いていました。しかし、海外へ行く機会も増え、日本の建築界に対する期待を実感することが多くなり、このまま傍観しているだけでいいのかと疑問を持つようになりました。関係がない立場だからこそ、言いたいことを好きに言えるような楽観性も重要であると思いつつも、当事者として巻き込まれないと分からない現代性、新しい建築を開拓していく技術などがあるはずだと思い、プロポーザルへの応募を決めました。直近数年間のプロジェクトの約半分はケアに関わるものですが、携わる建築分野に偏りが強くなりすぎると、建築の最前線にはいづらくなってしまうと感じています。様々な文化の変化や、多様な社会の側面などを随時自身の中で更新していきながら建築を作っていきたいと考えているので、特定の分野に留まらずに自分たちでどんどん開拓していくようなチャンスを掴みたいという強い想いも、応募のきっかけになったと思います。

ープロポーザル案と完成形では大きな変更があったのでしょうか。

プロポーザル応募時点では用途にとられない休憩所を第一希望としていたため、そもそも用途から変更されたことになります。建築的な提案としても大きく変わりました。クライアントは博覧会協会整備局に加え、ギャラリーの展示を管轄する催事課もいます。展示内容は数日から数週間で入れ替わるため、建築としてはできる限りプレーンなホワイトキューブを要求されていました。ギャラリーとしての機能的な要求がかなり強い中で、建築の新しい提案を盛り込んでいくことが難しいポイントでした。



写真展の様子。多数の人々が訪れていた。



1階「SQUARE」打合せ利用の様子 ©Yurika Kono



2階「GARDEN」 ©Yurika Kono



3階t e c oのフロア ©Yurika Kono



「BASE」の1階「SQUARE」奥にはキッチンがあり、手前が多目的なスペースとなっている。



「BASE」の外観 ©Yurika Kono

ー催事側との調整はどのように進められたのでしょうか。

当初から予算がかなり厳しく、要求面積の縮小などの設計条件の整理から始めていきました。諸条件が厳しい中、最初に提示された条件で、屋内展示と屋外展示の面積割合を1:1にするというものがあり、うまく建築に落とし込むことができれば面白いものになりそうな予感がしていました。屋外展示の部分は屋根付きを要望されていたことから空間のつくり方にも幅があり、ホワイトキューブに留まらない可変性のある見え方や、展示者によって異なる多様な使われ方を提案できるのではないかと考えていました。屋根が特徴的な空間になると考えていたので、半透明の素材で屋根をつくることや、多くの細い柱で屋根を軽やかに支える提案など、打合せの度に複数の提案を繰り返しました。整備局や催事課の要望に応えつつ、建築的にも豊かで新しい空間を模索していました。

ー新しい素材の一つとして、ベジタブルコンクリートを採用されていますが、どのような経緯で提案することになったのでしょうか。

プロポーザルの時点からベジタブルコンクリートを使用することを提案に盛り込んでいました。提案を作り始めた初期のころから、仮設建築物だからこそこの提案を考えており、建築の形だけではなく素材にも着目していました。

事務所を主宰してからの数年間、地方の芸術祭やアートイベントに参加することが多く、地元の自然素材を使って作品を作り、最終的には土に還るような取り組みを行っていました。当時から、何かを作って役目を終えたらゴミとして扱われるようになることに対して疑問を抱いており、今回のプロポーザルでも同じような考え方を応用できないかと考えました。

そこで、設計チームでリサーチを進めていく中で、最もリアリティがあり、かつ全貌が明らかではない面白そうなベジタブルコンクリートにたどり着きました。東京大学発のベンチャー企業 fabula 株式会社が開発していたので、私たちの方からアポイントを取り、打合せを重ねました。これまでにプロダクトなどの比較的小さなものは実績がありましたが、



「ギャラリーWEST」初期スタディ案



「ギャラリーWEST」正面から見る

建築レベルの大きなものは、今回が初めてのチャレンジでした。

ベジタブルコンクリートの原材料として、野菜に加えてセメント系の材料を混ぜたものであれば他の企業でも取り扱われているのですが、fabulaでは100%野菜で構成することを目指されていました。fabulaの信念として、今回の資材を作るために無理やり野菜を集めるのではなく、廃棄直前で余ってしまったものをどれほど集められるのかが難しく、協賛いただける企業を探すことも含めて長期的な計画で進めていきました。

野菜の種類によっては強度が出るものもあります。例えば白菜は圧縮強度が強いが、せん断力は劣るなど、材料によってのばらつきがあります。今回は大屋根の構造の一部に使用しているのですが、耐水性を持たせることが難しく、直接雨ざらしにならないように、ベジタブルコンクリートをルーバー状に配置した上にポリカーボネート波板を設置しています。また、法的に内装制限が掛かっていたため、さらに不燃シートを施すことで、法的要件をクリアしています。材料を採用するにあたって様々な実験を行いました。100%野菜で構成することにより、建築的な強度基準や法的要件を完全に満

たしていくことはまだ難しいと感じました。今回は自然な形で土に還せるような使い方を重視して、現実的なところを目指しました。会期後にどうなるかは未定ですが、今後のための試験体や、インスタレーションへの活用なども含めて色々と活用方法は考えられますが、本当に土に還していくようなことができればいいと思っています。

ー万博ならではの協働は他にもありましたか。

やはり万博ということで、前向きに協力する姿勢を見せてくれる企業ばかりでした。特に、構造設計事務所であるオーノJAPANは、度重なる設計要件の変更や、ベジタブルコンクリートといった新しい素材へのチャレンジも含め、本当にご苦労されたと思います。ただ、実験的な試みも多数あり、一緒になって楽しみながら設計が進められたと思っています。オーノJAPANでも大きな構造模型を作ってください、実際に荷重を掛けて支点を動かしてみたりしながら、意匠と構造のバランスが取れた設計を目指していきました。机上の計算だけでは理解しがたい、全体の形状と構造がリアルタイムにリンクして、それぞれの部材が設計されていく様子は、今回のようなプロジェクトだからこそ味わえた感触でした。コストとのバランスも鑑みながら、最終的にはできる限り規格材を用いて、大スパンの大屋根に柔らかさを持たせ、遠くから見た繊細さを表現できるよう、詳細な設計を詰めていきました。

万博のパビリオンは内部空間が話題になりがちですが、これは屋外にもギャラリースペースが必要ということで、外からでもプログラムが魅力的に見えるように、かつ気持ちよく過ごせるような空間が実現できたと思います。屋外スペースを挟む2つの内部ギャラリーの開口部



ベジタブルコンクリート ©fabula

を開けると、1つの大きなスペースとしても使えますし、片方に従属できるようにもできます。設計要件にもあったような、様々な使い方ができるので、従来のギャラリーのイメージにはないものが実現できました。それによって、来場者が興味を持って入っていく様子が見受けられます。人々を迎え入れるような半屋外空間があることや、ボリューム構成も影響しているかと思います。

―「ギャラリーWEST」の設計を通じて、新しい経験をたくさん積まれたと思います。この経験が活かされたと感じた他のプロジェクトはありますか。

ある程度、規則性が求められる建築の中でも、自由度を表現する重要性を改めて認識しました。現在は北海道で、特別養護老人ホームと地域交流拠点の複合施設の設計を進めていますが、このプロジェクトでもオーノJAPANと協働しています。隣地には共同住宅が並んでいて、数ブロック先では田畑が広がっているような敷地です。都市の規則的な骨格を引き受けつつも、共用部はその規則性にオーバーラップさせるような形で構築しようと考えています。街区はY字路と直交グリッドが入り混じったような形状をしていて、共用部がその流れを引き込むように、屋根の形状をスタディしています。構造が作る都市の骨格の新しさであったり、全体を包含していく形を目指して進めています。

―構造設計者との調整はどのように進められているのですか。

まずは私たちで作りたい空間を考えて、構造的な部分はある程度想定してから、構造設計者に相談します。こちらの意図を汲んでもらいつつも、構造合理性の観点から率直な意見を



「特別養護老人ホームと地域交流拠点の複合施設」スタディ模型

もらい、見え方も含めて相談し合いながらスタディを繰り返しています。

―万博のプロジェクトと比べて異なる点は、主にどの部分に感じられましたか。

進行プロジェクトの約8割は基本計画段階から携わっていて、敷地を探すことや、地域の人々と機能を検討していくことなど、入り込めば入り込むほど地域の骨格や魅力が見えてきます。法的な制度としての特別養護老人ホームは無くなったとしても違和感がないような風景を作っていくことに興味があるので、万博のようなコンテキストがほとんどない場所で作ることとは対照的です。万博だからこそ自由度を持たせられたという利点はありますが、今後はコンテキストの強い中でどう魅力を見出していくのがポイントであると感じています。

―万博プロジェクトを通じて、未来の建築について考えることがあったと思いますが、今後の建築において何が重要とお考えですか。

日本は定常社会になってきて、人口減少も進んでいます。開発してきた市街地から郊外、地方にかけて広がってきたこの状態を止めて、その中でどのように豊かに生きていくのかを考える段階に入っていると思います。その時に、リノベーションも含めて、新しく立ち上げる建築は、なぜその場所に立ちあがるべきなのか、本当に何が必要であるかを考えなければなりません。既存のものを使えば新しいものは必要ない場合もありますし、時には密度を減らしていくような可能性もあるかもしれない。私たちが計画の初期段階から携わることが多いのは、その地域に住まれている当事者が、自分の街の魅力や必要なものを客観視できていないことに対して、第三者目線でそれを見出したいと考えているからです。

建築を設計する人間は遊牧民のような人々だと思っています。遊牧民だからこそ発見できることはありますし、その発想が街にとって大事なものになっていきます。今後も一つのプロジェクトにできる限り長く携わってより良いものを残していきたいと思っていますし、建築は長い時間が掛かることも魅力だと感じています。建築の一生の中で、どれくらいの期間伴走できるか。また、そのような時間の掛け方の中で、その街らしい風景をどう作り、どう携わっていくのか考えることを必要とされ始めていると思います。

*「建築人2025年5月号 大阪・関西万博をめぐる」にて、「ギャラリーWEST」の記事を掲載しています。そちらもあわせてぜひご覧ください。



2つの屋内展示空間を半屋外空間がつなぐボリューム構成

聞き手 松下典央 武藤優哉

知られざる村野建築を佐賀に訪ねて

佐賀県職員研修所・教育センター 一九七九年

文・写真 松隈 洋〔神奈川大学建築学部教授〕

秋深まる二〇二五年十月二九日、一九七九年に竣工した佐賀県職員研修所・佐賀県教育センター（現・佐賀県自治修習所・佐賀県教育センター）と呼ばれる村野藤吾の知られざる公共建築を初めて訪れる機会があった。八八歳の米寿を迎える最晩年の村野が佐賀県内に手がけた唯一の建築だ。しかし、県教職員のための研修施設であることから、竣工時に建築雑誌には掲載されず、これまで一般公開されることもなかった。その

ため、今回、日本建築学会九州支部佐賀支所の主催、佐賀大学理工学部都市工学部門建築環境デザインコースの共催、佐賀県の後援により、「次世代の文化的資源活用まっくくり」をテーマに開かれた催しが、最初の建築見学会とシンポジウムになるという。だからなのだろう、平日にもかかわらず、多くの参加者が集い、見学会では熱い眼差しが建物の細部にまで注がれていた。また、続いて佐賀大学准教授の洲上貴由樹さんの



南側から見る白亜の全景



透明感のある簡素な宿泊室

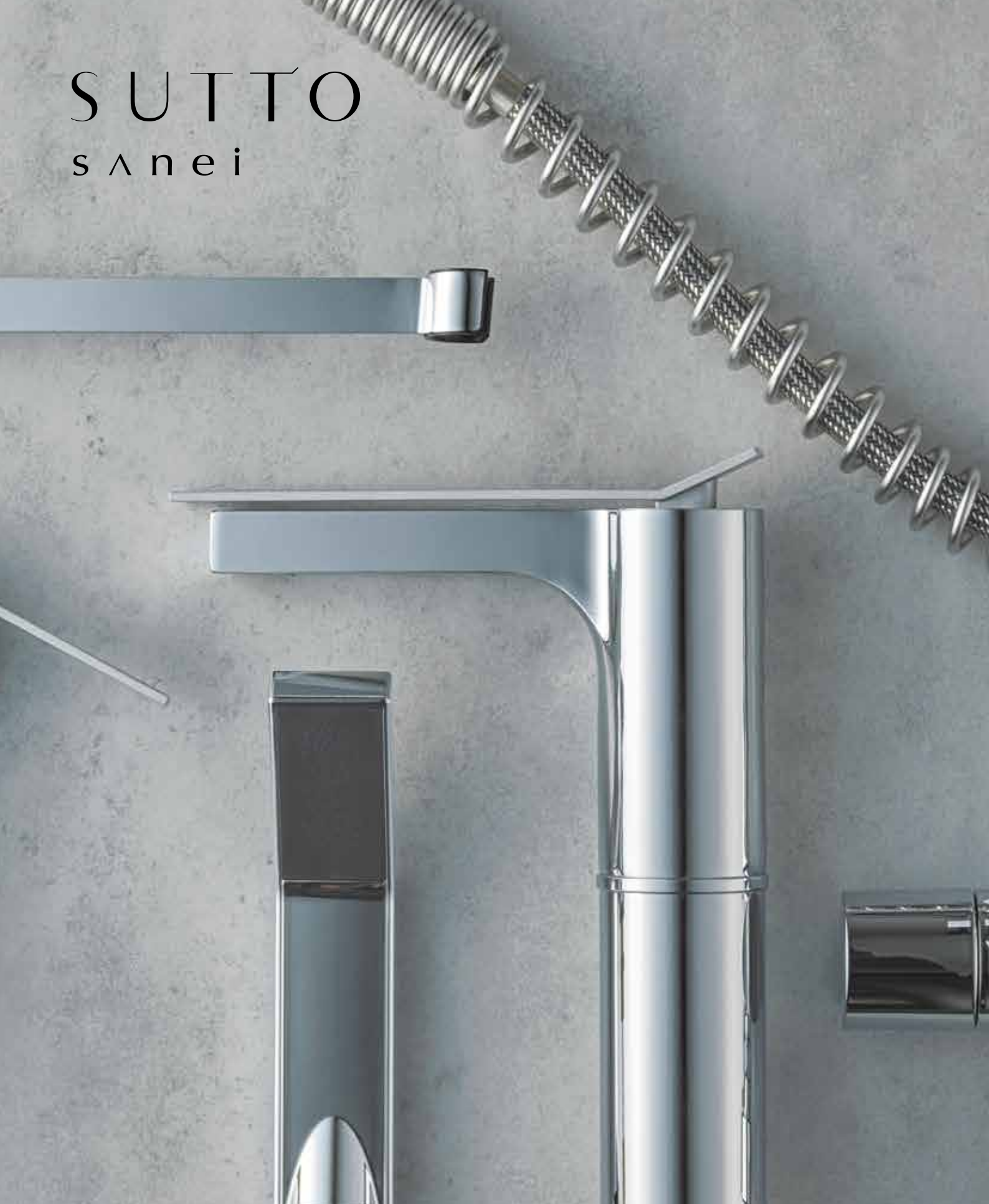
司会で行われたシンポジウムでは、一九七五年に村野・森建築事務所に入所され、この建築の現場監理を担当された元所員の関邦則さん（一九五〇年）が、遠く長野県から駆け付けて貴重なエピソードを披露され、筆者は村野について小講演を行い、対談役も務めた。

実は、この村野建築をきっかけとする佐賀県とのつながりは、二〇二二年秋、佐賀県立博物館で開催された特別展「建築の建築―日本の『建築』を築いた唐津の三巨匠―」に協力したことに始まる。この展覧会は、近代日本を象徴する数々の名建築を手がけた佐賀（唐津）出身の三人の建築家、辰野金吾（一八五四―一九一九年）、曾禰達蔵（一八五二―一九三七年）、村野藤吾（一八九一―一九八四年）の足跡と建築を紹介する初めての試みであり、村野の建築として、森五商店東京支店（一九三一年）、宇部市民館（一九三七年）、世界平和記念聖堂（一九五四年）、日生劇場（一九六三年）などの代表作と共に、この研修施設が初めて紹介された。また、現代美術家のヤマガミユキヒロさんが、この展覧会のために新たに描き下ろした辰野の東京駅（一九一四年）や曾禰の三菱一号館（一八九四年／二〇一〇年新築復元）と共に、村野の日生劇場の外観とホール内観の細密な鉛筆画も展示された。そして、リモートによる座談会も行われ、図録に収録されるなど充実した建築展だった。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の不自由な状況下にあったため、筆者は現地に足を運ぶこともできず、今回が初めての佐賀訪問の機会となったのである。

さて、この研修施設は、JR長崎本線の佐賀駅から車で約二〇分、佐賀市大和町の小高い丘陵地に位置する。今でこそ豊かに育った樹々の緑に包まれた自然豊かな周辺環境だが、関さんが紹介された竣工当時の写真では、樹々もまばらであり、時間をかけて整えられてきた風景であることがわかる。建物は、敷地の高低差を活かしながら、最も高い眺望の良い場所に東西方向に長く伸びる宿泊棟が置かれ、その中央部から渡り廊下が左右に枝分かれして、中庭を挟んで東側に職員研修棟、西側に教育研修棟が向き合うように配置されている。また、東西二棟の足元には玄関ポーチを兼ねたピロティが取られ、その下をアプローチ道路が東西に貫いて真っすぐに伸びていく。こうして、恵まれた広い敷地に枝分かれして手を広げるバランスの取れた周到な配置計画により、清新な透明感に包まれた内外の空間が生み出されている。鉄筋コンクリート造、地下一階、地上三階・五階、延床面積約七、七六三㎡の大きさを少しも感じさせない。

注目したいのは、すべての棟が単純明快な直方体であり、階段室なども含めて、縦長の小ぶりの窓が規則正しく並ぶ立面だけで構成されていることだ。そのため、階段室では踊り場の足元や壁の高い位置に窓が取られており、それが結果的に不思議な魅力を発していることにも気づかされる。また、そうして単純化された各棟のそっけない外観とは対照的に、各所に取られた外部階段や煙突などは、彫刻のようなフォルムで丁寧に作り込まれており、強い存在感を放ってアクセントになっている。残された研究報告（渡辺真弓、丹羽和彦「村野藤吾の佐賀県職員研修所・同教育センターの設計過程について」日本建築学会九州支部研究報告第四二号、二〇〇三年三月）によれば、一九七四年に設計は完了したものの、物価高騰による建設予算不足により、工事着工は一九七七年まで延期されてしまう。そのため、「できるだけ立派なものにしたい」という村野の当初の意図は果たされず、コストの抑制を余儀なくされたという。けれども、そこは長い経験を積み重ねて来た名匠村野の腕の見せ所である。むしろ、ローコストの条件を逆手に取って、簡素で清廉な空間の質感をより純化させてみせる、との思いで、設計変更に取り組んだに違いない。その研ぎ澄まされた造形には、同じく厳しい予算でこの直前に手がけたふたつの宗教建築、西宮トラピスチヌ修道院（一九六九年）と日本ルーテル神学大学（同）の経験が活かされていたのだと思う。また、それが、教職員の研修施設という内向的な性格と合致するものであることも幸いしたのである。今回現地を訪れてみて、何よりも感銘を覚えたのは、人間の身体を優しく包み込むホスピタリティのあふれる落ち着いたたたずまいに、若い学生たちを含む参加者全員が深く魅せられていたことだった。そして、竣工から四十六年、大切に使われてきた変わらない姿を感慨深く見つめる関さんの眼差しが印象に残った。この建築がより広く市民へと開かれた生きた地域の建築遺産として幅広く活用されていくことを願いつつ、遠くから見守っていたい。

SUTTO
sane i



水をつなぐ
SANEI 株式会社





立体的なテラスで内外をつなぐ工学新棟



奥行のあるメザニンテラスで内外をつなぐ新センター棟